
ある田舎のBarにて

チリドック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある田舎のBarにて

【著者名】

【作者名】
チリドック

N4260Y

【あらすじ】

とある田舎街の片隅にひっそりと佇むバー。

一日も休むことのないこのBarは、女性バーテンダーひかりを中心

ゆっくりり・ja・n・サウンドと共に時を重ねる。

ひかりのつくるカクテルは甘くもあり刺激的なことで知られていた。そしてなにより、彼女の持つ独特の雰囲気の人気があった。

そして今夜も、彼女が生み出すカクテルと彼女の友となる人々がやつてくる。

自身のアメーバブログにも掲載中です。

カクテル1

カラソカラソ・・・・・

店のベルが鳴る音のあとに、
「いらっしゃいませ」

数メートル先のカウンターを隔てて立っていた女性に、明るい挨拶をされる。

背が高くて線の細い目鼻立ちがしつかりと整つた長い黒髪を一つに束ねたきれいな人だった。

なんとなくオーラのようなものを感じた。

私なんかとは正反対の、いわゆる世間一般に言う「いい女」というたぐいの人間だ。

ゆっくり歩を進ませながらぐるりと店内を見回す。

お客様は3・4人しかおらずそれほど混んでいるようではなかつた。

整然と並べられた丸テーブルと、その向かいにどんと構えているカウンター。

それを囲む壁際には、お洒落なインテリアと見たこともない、見るからに高そうなボトル達が出番をじつと静かに待っている。どこかで聞いたことのあるJAZZBGMがまるで空気の一部のように私の心へ染みてくる気がした。

どこに座るか迷つていると、バーテンダーが「よろしかつたらこちらへどうぞ」

カウンターの隅に手を伸ばしてにっこりしながら促す。

明らかにこいつらが初めてだと見透かされたようで恥ずかしかった。

私は無言でそこに腰掛けると、友人に聞いて唯一知っていた

力クテル『マティニー』を頼んだ。

今日は人生で初めての失恋をした夜。

婚約もしていたが、解消した。

短大の頃から彼と付き合って約十年。

まもなく三十を迎える女が

こんなことをいうのは笑われるだろうか？

遠距離恋愛でこれまで、五回も浮氣されたが私の人生から彼が

消えて

しまったことが家族を失うことと同等に思えていたから、何度も踏みとどまつた。

それでもついに終わってしまったのは一言で言えば疲れたからだと思う。

多くのことが積み重なって、私の心の許容量を超えてしまったのだ。

だからけつして嫌いになつたわけではない。

いまでも彼のことは好きだし、掘り下げるれば掘り下げるほど涙が溢れる。

好きだけではどうにもならないこともあると思つ私は『負け犬』なのだろうか・・・

マティニーを一気に飲み干して、オリーブを人差し指で前後に弄びながら

物思いにふける私の後ろ姿はなんて惨めなのだろう。

私は、壁に『お勧め力クテル』という張り紙を見つけると適当にその中から『ジンフィズ』を頼んだ。

とその時隣に座っていた男が話しかけてきた。

「あの、すみません大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫です。ありがとうございます」

内心虚をつかれて動搖していたが平静を装つて笑顔で返す。

歳は私より少し上の、落ち着いた雰囲気のある男だつた。

「驚かせてしまつたようですね申し訳ありません。なんだかほつとけなくて」

「・・・・・」

これがナンパというものだらうか。

生まれてこの方こういうものには縁がなかつたのでどう対処すればいいのかわからなかつた。

正直いまはほつといて欲しい。

不自然な沈黙。

男は居心地悪げにグラスの液体を一気に飲み干した。

一呼吸置いてから、男は呟いた。

「実は今日、私は一人の女性に告白して見事に撃墜されました。もしよかつたら貴女の意見を聞かせてもらえませんか?」

「・・・・・」

言葉が見つからないとき、ジンフィズが運ばれてきた。

それをぱつと見た感じではかき氷にストローが一本突き刺さつていてその下に

お酒が漂つているような風景だつた。

ストローが一人分刺さつているのはバーテンダーのお節介かと訝しげに

彼女を見やると、すかさず彼女は氷がストローに詰まる場合が

ござりますので予備ですよと答える。

なるほどと思しながら、ストローに口を付ける。

とてもおいしかつたが、飲むにつれて頭が痛くなりそうだ。

と、強い視線を感じて男を見るとつい男の顔面に向けて吹き出してしまつた。

いまにも泣き出しそうな、切ない表情を浮かべていたため思わずしてしまつたのだ。

かあーっと頭が熱くなる。最悪だ人生で最低の夜だと自分を呪

う。

何度も頭を下げて謝罪の言葉を祈りのよつに呴く。

バー・テンドラーがすかさず渡したおしほりで顔を拭いながら、男は苦笑する。

「いえ大丈夫、大丈夫ですお気になさらず。ただもしよかつたら、話だけでも

聞いていただければ嬉しいんですけど……」

「……わかりました。私でよろしければ」

静かに息を吐いて気を静める。

なんとか、これ以上男を刺激しないよつに終わらせよう。

と、思い愛想笑いを浮かべる。

「ありがとうございます」

男はお勧めのコーニャックを、ビバー・テンドラーに頼んでからゆっくりと話し始める。

職場の同期で、入社から十年以上一緒に頑張ってきた女性だったらしい。

聰明で誰にでも優しく接してくれる社内のアイドル的存在だったそうだ。

男は良き友人としてまた仕事のパートナーとして彼女を良く助けた。

そして隣町に今度新しくできる支店を任せられることがこの間決まったので、

離れる前に告白したというわけだった。

しかしその彼女は、

「そんな冗談はこれつきりにしてよね」と、笑いながら去つていったという。

ここまで話して、男ははあとため息をつく。

「どう思います？ 酷くないですか？」

「どう？ ってそういう対象には見られないってことじゃないんですか？」

良いお友達でいられるんだいいんじやないですか？「はあ、そうですね。貴女は好きな人がいますか？」

「ええ、いますよ」

男は私の婚約指輪の痕がまだ新しい左薬指をじろりと見て呟く。
私はその視線が気持ち悪く薬指を隠した。

「おつきあい長いんですか？」

私は男のその動作が酷く、異性を品定めする人間の汚い部分を見た気がして気分が悪くなつた。

「十年以上でした。しかもついさつき婚約解消しましたよ！」

貴方は私にこれ以上何を求めているんですか！？」

その時、彼に對して取つた行動に対しじばらくの間責めることになる。

汚い物でも見るよに、さらに自分も似た状況にありながら見ず知らずの人当たつている。

酔いのせいにするほど私はまだ神経が図太くはなかつた。

「え・・・あ、すみません。余計なこと言つてしまつて」

先に謝られ、私はなかばやけぎみにストローで思いつきりカクテルを飲み込む。

キーン、とかき氷の痛みが頭に走り、顔をしかめる。
手の甲に涙がしたたり落ちている。酔つたようだ。

喉が震え、胸が詰まりそうなくらい熱くなる。

嗚咽を押し殺すように、私は深く静かに深呼吸した。

とその時、先ほど聞いた澄んだ明るい声色が静かに耳に入ってきた。

「お客様。あまり女の子を困らせないでくださいよ」

「え、あ・・・ほんとす、すいません」

狼狽えたように、男は答える。動搖でグラスを持つ手が震えているのか、

氷の震える音が聞こえて想像できた。

「それにまだふられたとは決まってないかもしませんよ？ 気づ

いてないだけかも」

「はあ・・・」

涙を拭い、顔を上げるとバー・テンダーが男に向かい合いつように立つていた。

一瞬、バー・テンダーが私をちらりと見て微笑んだ。すぐに男に視線を戻すと

斜向かいの壁に張り付いている柱時計に目を向けて彼の視線を促す。

「まだ電話すれば間に合つかもしれませんよ～。女の子は夜になるとちょっとぴり素直になるんですからひょっとすると・・・」

「はあ・・・」

感動したように感嘆の声を漏らす男は、突然急いだように席を立つとお会計をすませる。

そして私の方に向き直つて口を開く。

「本当にすみません。もしにこでまた偶然お会いしたりおじらせてくれださい！ それじゃ」

と言い捨てて颯爽と店を出て行つた。

私は彼の背中を見送ることなく、カラソカラソといつぶるの音に耳を澄ませていた。

ふと、バー・テンダーと目があつた。

「すみませんうるさかつたですかね？」

胸元に「ひかり」とネームを付けたその女性は、グラスを磨きながら

まっすぐに私を見つめて口を開く。

「いいえそんなことありません。それにしても男はいくつになつても可愛いですね～」

「はははそうですね」

一瞬だけ、彼女の瞳に垣間見えた寂しげな光がなぜかすごく切なぐ感じられた。

「よころでお客様は、幸せな時間・・・結構ございましたか？」

一言一言をゆっくり丁寧に、耳元に囁くよつた話し方に思わず泣き出しそうになりましたながらもこらえてなんとか言葉に出した。

「はいとでも、しあわせでした」

彼女は心底嬉しそうに手を細めて、呟く。

「そうそれじゃ、そんなに悲しまなくて。笑つていればきっとそのうちもっと素敵な天使が側におりてくるかも。つてちょっとくさいわねごめんなさい。でも本当よ？前を見ないと暗くて何も見えないから」

顔を少し赤くして彼女は微笑んでいると、思い出したよつて足早にコンポの前へいってボリュームを上げる。

リズミカルだがどこか哀愁が漂うサックスの音色が店内を充満する。

私は爪先でコツコツとカウンターをリズムを取る。

濡れた瞼をハンカチで拭いながら、音楽に私は身を委ねた。

いつのまにかグラスの中にいた氷はもうすでに、溶けていた。

ガチャ

カラソカラソ・・・・・

「「」来店ありがとうございました。

またのお越しを心よつお待ち申し上げておつまゆ

おわり

カクテル1（後書き）

会社の同僚女性の話を元に書いてみました。
ちなみに結末は紆余曲折ありましたがご結婚されましたw

カクテル2（前書き）

カクテル2

「ねえねえひかり。水着貸して」

「どしたのいきなり？ まさか烏龍茶で酔つた訳じゃないわよね？」

ひかりはグラスを磨きながら、カウンターに頬杖を付いて微笑む
幼なじみに呟いた。

ひんやりとエアコンの効いた薄暗い店内に、灰皿に横たわる一
筋の煙草の煙が、

柔らかい輪郭で糸を紡ぎ暗い天井にすーっと吸い込まれていく。
灰皿の縁を人差し指でなぞりながら、一方で烏龍茶を少し飲んでから、彼女は呟く。

「違うよ～来週彼と海に行くんだけどいいのないし、買うのも面倒だから。ひかりセンスいいもんね」

「んー、でもさおりにはきついんじゃない？」

ひかりは意地の悪い笑みを浮かべながら、手近に置いてあつたオーブンの実を口にした。

これはひかりのよくする癖で、こうして集中力を高めるのだと友人たちにひかりは語っていた。

「意地悪言わないでよ～ 頑張るからお願ひ～」

さおりは両手を合わせて、少しにやにやしながら言った。
(何を頑張るのよ)

そこにやけ顔を一瞥しながら、はあとひかりは胸中で呟いた。
「しかたないなあ。いいよ、もうあたしには多分必要ないからあげる」

「え、本当ー？ サンキューも「マジか～わ～い～」

「・・・・・なんかむかつくなー」

ちょっと恥ずかしくてそんなことを言つたが、さおりはそれを
気にもせず笑つて見せた。

と、その時

カラランカララン・・・・・

ベルの音のあとに、

「いらっしゃいませ」

扉を閉める私の背中に、聞き覚えのある声がかけられた。

振り返ると、ほんやりしたオレンジ色の明かりの中に一人の女性がぽつんとたっている。

開店时刻からそれほど時間が経っていないせいかお客様は、

カウンター席の右端に女一人だけ腰掛けていた。

この店を知つて、もう三年ほどになるがこの时刻に来たのは初めてだつた。

そのせいか、なんだか落ち着かない。

私はお気に入りだつたカウンター席中央に腰掛けると、すっと差し出されたおしおりで臉を軽くふいた。

「お久しぶりですね木村様。・・・一ヶ月ぶりでしょうか」

「そうですね。ひかりさんは変わらないですね」

「いえいえ皆様から日々いたくお褒め言葉のおかげです。毎日充実した日を過ごさせていただいております。さて『』注文は、

いかがなさいますか?」

「んー、ジントーック、もりえますか? あと鴨肉スライスしたやつも」

バー・テンダーは眼をやや細めると軽く頭を下げて、
「かしこまりました」

呟いた。

この仕草が、私は内心好きだつたりする。
慎ましやかで凜としているような雰囲気のある女性は見ている
だけで気持ちいい。

そんなことを思つている間に、カクテルが完成してコースター
にグラスが腰掛ける。

「不躾で申し訳ありませんがなにか、お悩みでもありますか？」
私グラスを見つめていた眼を彼女に向けた。

眼を細めて、まるで黒曜石のような美しい瞳をこぢらへます
ぐとむけている。

「ん、いや」

理由は分からぬ、私は軽く首を振つて一口飲んだ。

かすかな酸味が口の中に広がり爽やかな後味がふわりと私の脳
内を揺さぶる。

(空腹にはやはり応える)

私は静かに息を吐くと、再び彼女の顔を見返した。

バー・テンダーは変わらぬ様子でこちらを時々見つづ、
まるで精密機械のようにグラスや氷、彼女の子供達であるボトル
達を操る。

カラランカララン・・・・・

「いらっしゃいませ！」

4人ほどの男女が、テーブルに座つた。

入り口の近くにあるトイレの隣に従業員扉があつて、
そこから若いボーイが出てきて彼等にメニューを差し出す。

その様子を、まるで自分の子供でも見るかのように暖かく彼女
は見つめていた。

「あのや、一つ意見を聞かせて欲しいんだけど……良い?」

「はい。私でよろしければ、」

作業の手は止めずに、眼だけを私に止めてそつ答えた。

・・・・・BGMがアップテンポなものからじつとりと哀愁漂つものに変わる。

音楽とここの空気に後押しされて私は静かに、言葉を間違えぬよう慎重に話した。

まず自分は営業の仕事をしていく、転勤が多くせわしないこと。実家のある街に恋人を残してきたこと。

最近また隣の県にある支店へ異動になつたこと。

そのあと突然恋人に別れを切り出されたこと。

恋人は私を嫌いになつたわけでも、他に好きな男ができたわけでもなく

ただ別れたいと言う話だった。

自分の中では別れたくないという気持ちが強く、しかしじうすればいいのか・・・

それについて、端的に話した。

見慣れたこの女性バーテンダーは、一言も発さず耳だけを私に傾けてくれていた。

お洒落なグラスに、鮮やかな色の液体を注ぐ様子を眺めながら、自分の気持ちの断片と重ね合わせ胸が詰まりそうになつた。

話を終えて目頭が熱くなつた私は不意に田線をグラスを持つ自分の手に置く。

沸き上がる衝動に驚いている自分の内から、かすかに漏れた想いが手を震わせている。

(弱いな・・・)

胸中で咳くと、ふつと息を吐いて聞き手となつてくれていた彼女に視線を戻す。

仕事が少し落ち着いた様子で、彼女はまたグラスを磨く作業に

戻っていた。

視線がぴたりと合つ。

「・・・それで、別れたくないんだけど。なにか良い方法ない?」

彼女は口元に柔らかな笑みを浮かべ、眼を細めると口を開いた。「そうですね一言だけ申し上げさせていただきますと、

馬鹿なくらいロマンチックになるですかね・・・

色々、お一人にしか分からぬ悩もあるでしょうからあれこれと申し上げられませんが、

現実を直視しがちな私たちでもたまには、夢を見たがる習性だと思うんですけど・・・

うーんうまくいえないな。生意氣いつて申し訳ありません

女性バー・テンドラーは、気恥ずかしそうにコンポの所へ足早に歩いて音量を上げた。

「いや、いいよ。ありがと」

歩いていく彼女の背中に眩ぐ。

酔いのせいか感傷的になつたせいか、突然眩暈を覚えて目頭を押さえる。

その隙間から、涙が滲み出てきたことに驚く。

咳払いをしてグラスの液体を一気に飲み干すと、気恥ずかしさからか私は苦笑した。

その時、私は『もう終わろう』と心に決めた。

そこまで彼女を追いつめた自分と決別するためにも、

それでお互いが将来別々の道で幸せになることができたらそれで良いと思えたからだ。

淡く熱く沸き上がるこの気持ちを意識のそこにゆっくり沈めながら、バーテンダーに呴いた。

「コットンフラワーを」

「はい、かしこまりました」

相変わらず静かで凛とした物腰で軽く会釈をして、彼女は微笑んだ。

その微笑みが失った女性とだぶつて、私はまた眩暈を覚えた。

ガチャ

カラランカララン・・・・・

「ありがとうございました。

またの『ご来店、心よりお待ち申し上げております』

・・・・・

「大丈夫?」

「ん、なにが? なんか飲む?」

「じゃあ、水ちょうどいい」

「ほーい」

ひかりはきょとんと仕事とは180度違う間の抜けたトーンで答えると、機械的に素早く水を渡す。

すでに日付は代わり、閉店まで小一時間ほどだがこの悪友は来店したときから

まったく変わった様子もなくカウンターの片隅に腰掛けている。

お客様も、さおり一人だけで今夜も終わりだという影が佇んでいるようだ。

ひかりは映画音楽も良く聴きいまは「シェルブルールの雨傘」の流麗な音楽が

薄暗い店内に腰掛けていた。

ただ、さおりはその音楽がひかりのなかでの思い出の曲と直感的にわかつていた。

しかしひかりも、さおり自身も聞かれることが趣味ではないので語ることはないが、

まるで不意に見た夕焼けに感動したあと、ひどい寂寥感に襲われることに似たその感情

が淡くこみ上げているのではないかと、オリーブを加えながらグラスを磨く

友人を観察しながらそう思った。

「恋愛って、ほんとう融通が利かないわよね」

整然と並び照明によって神秘的な輝きを放つボトル達をカウンタ一越しに眺めながらさおりは呟く。

意識的にひかりを一瞥すると、ちょうど田があつた。

ひかりは、軽く頷いていつものように田を細める。考え方をしている時の

この癖がさおりは内心好きだった。

嘆息混じりに、加えたオリーブを口からだすとひかりは呟いた。
「会えないときに会えないのと、話したいときに話せないこと。
そのどちらも叶えられなくなつたら終わりだと言つことつて言えるかな？」

さおりはこくんと頷いて、

「確かに。もちろん例外を認めた上でね。そして誰もが自分たちは例外と信じて悲しむのよ」

「・・・馬鹿だよねー」

くすぐりと、ひかりは微笑む。目を細め、さおりの瞳を覗き込むようになつた。

最小限の会話で分かり合える友人に、ひかりは心底感謝した。

「そうねでも、そんな人生もまんざら嫌いなわけじゃないでしょ？」

「・・・もちろん」

お互い顔を見合わせて微笑む。

ひかりは磨いていたグラスに水を注いで、さおりと乾杯した。
カンツ、カラ
氷がグラスにこする音とガラスとガラスがこする音。
それぞれの音が虚しく店内に沈み、静寂がBarの住人を包み
込むとやがてBarはまた眠りについた。

カクテル2（後書き）

これも会社の同僚の実話を元に書きました。
結末は残念でしたけど・・・

カクテル3

今月いつぱいで退社する同僚の送別会帰りに、

一人で行きつけのバーに立ち寄った。

飲み会で強引に愛想笑いしていた自分を癒してやりたかった。

静かな仄暗いカウンターの隅で、それこそ店の壁に掛けられて
いる

ライオンの頭部の隣で人間である自分を捨てて
いつそ剥製にされてかけられたい気分だった。

しかしそのささやかな幸せも、隣に座っていた女性に壊された。

突然話しかけられ、気がつくと女性はボクに質問攻めしていた。

「彼女いるの？」

から始まり、首を横に振るとじりりと指をしてケラケラと笑い出
したり。

「あたしネクタイ結んであげるのすきなんだあ

と言つなり、ボクの首元をいじり始めたと思つたら

首がつぶれるかと思ひへりこせつへネクタイを結ばれた。

グラスを丁寧に磨いているバーテンダーに救いを求め目をやると、

微笑んで頷いたのみだった。

ボクはなんて非力なんだろ？

もつと人に対してもつきとと言える強くてしつかりした男だつたら、

そもそも何でも飲むこともなく隣の客に首を締められていなはずだ。

我慢も限界に来ていたボクは飲みかけのグラスを

一気に飲み干して席を立とつとした時も、

「女に振られたんだつたらちつせつしてから帰らつか！？ おねーちゃんきいたげるよー？」

「なんで知ってるんですか？」

咄嗟に出た言葉に失笑する自分、そしてポンポンと肩を叩かれつづ

まあまあ座りなといわれ氣が付くと席に戻つていての自分に馬鹿と内心で言つてやる。

「なんとなく分かるんだよー、バーでまつたり自慰行為に

浸っている人種はだいたい仕事が異性ごとだよん」

偉そうな言いぐさ。ボクは田舎を呑ませなによつてして、

また席を立つと五円蠅くなりそうなので適時に

いつぱい頼んで酔いつぶれるまで待とうと黙った。

じの調子ならすぐ行落ちるだろ？

「あの〜リトルウイッチ、ください」

「はい、かしらまりました。ありがとうございます」

バー・テンダーは丁寧に会釈すると自分と真逆の隅にいる女性客と会話を続ける。

二二〇・第一回

女性はこれらの動きは無視して続ける。

「んで、どうした小僧！」

ボクは突っ込まれないよう静かに嘆息した。

社内で想いを寄せつつ色々相談に乗っていた女性が、寿退社で先

ほどまで送別会だつた。

送別会解散の際、彼女は何の変わりもなくボクの肩を優しく叩いて、

「色々本当にお世話をなつて、何度も言葉に出しても言い切れませんけど

ありがとうございました。お仕事一緒にしていくて楽しかったです
一礼して、二次会にボクを誘うことなく他の社員達と夜闇に消え
た。

悔しかった。

この想いの原因を探つてみるとはつきりと自分の想いを言わず、
結婚相手となつた我が親友を紹介したのも自分だし、
その友人のプレゼンといふアピールしてやつたのも自分だし。
彼女は何も悪くない。

一次会のことも明日ボクが出勤早いと知つていて気を遣つてのことなのだ。

つていうかそう自分に言い聞かせている時点ではばいだらう・
・うん。

もういいから泣きたい。一人で泣きたいだつてば。だからほつ
とけ！！

と、こうじことをもひるん最後の三行は胸の内にしまったが、簡単に話した。

ため息混じりに、視線をグラスから聞き手の女性に向ける

恐るじく真面目に自分を見てくることに驚き田を返らした。

そして、まじまじとボクの田を見て

「あはははアンタ、ばつかじやねえの？」

「へ？」

聞こえた言葉が予想外というか、初めて聞く言葉でもありボクは固まつた。

その様子をまるで面白がるかのように女性はゴメンゴメンと自分の肩を叩いてくる。

「もう、いいですよー。」ゆづく

ため息混じりに語尾を荒げて席を立とうと決心した、その時だつた。

「別に良いけど、彼女を悪者にするのだけはやめなさいよ。

聞いてると他人のせいに思ははじめているでしょう？」

「・・・・・

「あはははわっかりやすいーーーーーえ、つもやだ耳まで赤くしち
やつて」

(くそつ)

内心でボクは、泣きたかつたというか泣いていた。

気持ちを見事に酔っぱらって射抜かれ、驚き固まつたところを
弄られるという男と

しては大変恥ずかしい状況にボクは陥っているのだ。

気が付くとボクは座つて、カクテルを一気に飲み干していた。

隣で彼女が小さく拍手する。

「もうお願いですから、勘弁してください」

ペニペニ頭を下げながら彼女に懇願する。

顔を上げて彼女の顔を見るとかすんで見えたので田を擦ると、
液体が指に付いていた。

いつの間にか泣いていたらしい。

飲み屋で、しかも偶然会った女性にここまで揺さぶられた」とい
かつた。

自分はなんと情けないのでつと胸が焼け焦げそつなくらい辛

こんな辛い夜は初めてだった。

明日からは、想いを馳せていた彼女とは同僚ではなくたんなる親友の彼女となる。

それをボクは、温かい目で見守つてやる。その覚悟を持ちたかつた夜でもあったのに。

・・・・・

「モスクワミュールください」

親友が好きなカクテル。それを同僚の彼女に教えたらい、

会社の集まりや親友と三人での飲み会でも彼女はそれを頼むようになつた。

本当はそれもあつて、嫌いになつたカクテルなのにいつのまにか頼んでいる。

そんな自分が、もう信じられない。

彼女が好きになつた、それも自分が紹介したカクテルを飲んでいる。

それを反芻していると、涙が自然と溢れた。

「お待たせ致しました。どうぞモスクワミュールです」

優雅な物腰で空いたグラスと入れ替わりに、赤銅色のグラスを置く。

「だからさあ、被害者って顔すんなつていつてんのー!?」

「あのさあ貴女に関係ないでしょ！」

「それが関係あんのよ」

ボクは、つい大声で彼女に視線を送り際に言った。

後々省みて、酔っていたとかたづける。

「なにがあるんですかあああーー！」

大声にも、動ぜず女性はじっとこちらを見つめて呟いた。

「あんたに惚れたのよ。ここに通つてるあんたを見ててさ。

同僚の女が好きな癖に友達に肩もたせている不器用

なお前にいい

人差し指をボクの額に押しつけて、ぎりぎりと爪で刺しながら呟く。

「いつて！・・・・・・！？」

人差し指を払いのけて、しかめた顔を上げて見た彼女表情を見て、ボクは絶句した。

鼻をすすりつつ、田を赤くして涙を流していた。

グラスを持つ手が震えているのが印象的だった。

「どうしたんですか？」

首をかしげて、尋ねると彼女は引きつった笑みを浮かべて呟く。

「あ、あのさあ。わかるかな・・・あたし不器用なんだよ。

それで、アンタも不器用みたい・・・じゃん？」

「はあ」

確実に自分の肺腑を抉られる気分だったが堪え忍ぶ。

「試しに付き合ってみない？ 似たもの同士つまづくと思つんだ
けどな」

ボクはつーん、と唸りながらカクテルを一気に飲み干した。

だが酔いで鈍くなつた思考では、わざとらしさの間も役に立たない。

そう思ったとき、気が付くとボクは頷いていた。

「実験期間がつきますけど、それでもよければ」

ハンカチで口元を抑え、鼻をすすりながら彼女は応える。

「馬鹿、わかりずらいんだよ！」

ボクの椅子を軽く蹴つて赤面しているその女性の瞳は、
とても綺麗で真っ直ぐとボクだけを見てくれていたとその時初
めて気づいた。

・・・・・

ガチャ

カラソカラソ・・・・・

「ありがとうございました。」

またの「来店、心よりお待ち申し上げております。」

是非今度はお一人でいらしてください」と

・・・・・

「眠いなあ」

「そりや開店から閉店までカウンターで飲んでりや そりなるわよ

お尻痛くならない?」

「皮が厚いのあたし」

「はいはいわかつたわかつた」

「何度も言つけどあたし始めてみた」

「なにが?」

「恋人になる瞬間」

ひかりは苦笑しながら、悪友のさおりにカクテルを差し出す。

さおりは、赤いそのカクテルを面白そうに眺めた。

「なに、毒入つてないよ? さおりの言つたとおりあの一人をママに作つただけ」

自分用にストックしておいた、オリーブをつまみながらひかりは呟く。

ひかりは片づけと、明日の簡単な仕込みにかかっており

手元はとんでもない早さで動いていた。

酔つている密がそれをじっと見ていくとめまこをおしゃりしこ。

さおりは少しの間斜に構えて、カクテルを観察していたがやがて類杖を付いて一口、口にすると誰もいない正面をじっと見たまま口を開いた。

「なんて名前のカクテル？」

手元を止めず、ひかるは答える。

「メイフォア」

「へー」

「梅酒がベースなの。梅酒好きだったわよね」

さおりは視線は変えずこくんと頷いて、ペースサインをつくる。

彼女らしくない反応に、ひかりは興味をそそられて、

「なになに、ビワしたの？　あのふたりにあだられた？」

眉間に皺を寄せて咳くとおつは冷笑を浮かべながら、

いつのまにか紅く潤んだ瞳をひかりに向けて咳く。

「年上の女が好きって男、どう思ひへ？」

「つーん・・・器が出かけりや いいんじゃない？」

「そりだよねえ。年上とか言つたつて女は男に頼りたい生き物だもんね。

結局されるよつはそういうのよ。だからわ

よつせじ思つやりがなことわ・・・」

「・・・・・」

ひかりはふーん、意味ありげにさおりを観察しながら呻くと洗い立てのグラスを表に返します。

一度笑顔でさおりに一瞥してからあるカクテルを作つて差し出す。

「どうぞ、アクセサリーついて。サービスだよ」

「ん、ありがと」

一口飲む。さおりは笑顔で言葉にはせぬ口の形でおこしとあらわした。

ひかりはありがとづゝ、ヒレバと頷いて、傍らに置いている水を一口飲んでから、呟いた。

「ねえ、聞こえる?『氣づいてる?』

「私の心鳴が」

「貴方の寝顔を背にすすり泣く音でもいい」

「貴方の発する言葉一つ一つに私は心を傾けていたい」と元気

「そんなわたしに貴方は少しでも感じていただけていますか?」

「それがいつか通じるよ」と、私はただひたすら祈っています

「それでも涙が溢れるのは、一番通じる貴方へのサインなんだ

うつけど

「見せる勇気が沸かないことを許してください」

「・・・・・」

「なんか・・・ぐさつと来るね」

「うん、最初泣けた」

「けどひかりは人前で泣かないよね? 強いよ」

小首をかしげて、いつの間にか流している大粒の涙を振り払つこともなくさおりは尋ねた。

その仕草に、さおりは目頭が熱くなつたが踏みどまり微笑ん

で答える。

「強くはないよ。臆病すぎるんだよ、自分を人に見せた後に聞く言葉があたしは怖いの。

でも昔のことにも練とか、故意に避けていることがあるわけじゃないのよ。

別に過去の人を想うだけならいいとおもつし、

ただ悩みを抱えて前に進めなくなるくらいなら、そんなのないほつがましだとおもうけど」

「・・・そつか。」めんね思い出をせて

「いやいこよ。」いつかいつか聞いてくれてありがと」

そのあと、二人はお互いの事を口に出すことはなかった。

それでも夜はマイペースに時の上を流れ落ち、朝と暁がまた沈むのを待ち続ける。

自分の都合とは関係なく運命は不意に自分の前に道を開いてくる。

そこに向かうのは勇気とか大げさなものは必要なく、遊び心が必要なのだとひかりは思った。

そしてまた、Barは様々な旅人の黄昏を待ち望みつつ眠りについた。

END

カクテル3（後書き）

草食男子と戸思いな女傑をテーマに書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4260y/>

ある田舎のBarにて

2011年11月17日18時37分発行